

# 「風吹けば」詠の語り

## — 『大和物語』 第四百十九段論 —

玉田沙織

はじめに

平安時代の前期に成立した『大和物語』は、歌語り性の強さを指摘されながらも、いわゆる「歌物語」ジャンルの作品と認められている。ジャンル分類はあくまで近代以降の便宜的把握とは言え、『大和物語』の特徴は、「歌物語」の「和歌を中心とした小話を集積した仮名文の物語集」との定義に合致する。しかしその一方で、和歌の位置づけや和歌と地の文との関係性については、十分に明らかとは言えない。

『大和物語』の和歌は、どのような関心から語られるのか。本稿ではその典型として、『古今和歌集』『伊勢物語』に重出歌を持ち、比較を通して独自性をうかがいうる第四百十九段を取りあげ、語り手が和歌に見出した作用とその語り方を論じる。論の途上では、語り手の関心の端的な現れである草子地の特徴を指摘し、歌物語としての『大和物語』の特質にも言及したい。

### 一 焦点化を企図した語り

『大和物語』第四百十九段は、次のとおりである。『古今和歌集』『伊勢物語』との比較の都合上、共通要素を持つ箇所には傍線と番号を付して掲げる。

昔、大和の国葛城の郡に住む男女ありけり。この女、容貌いときよらなり。年ごろ思ひかはして住むに、この女①いと悪くなりければ、思ひわづらひて、限りなく思ひながら、妻を儲けてけり。この今の妻は富たる女になむありける。殊に思はねど、行けば、いみじう勞り、身の装束もいときよらにせさせけり。かく賑わわしき所に慣らひて、来たれば、この女いと悪②げにてゐて、かく外に歩けど、さらに妬げにもみえずなどあれば、いと「あはれ」と思ひけり。心地には限りなく妬く、「心うし」と思ふ

を、忍ぶるになむありける。<sup>③</sup>「留まりなむ」と思ふ夜も、なほ「往ね」と言ひければ、<sup>④</sup>「我がかく歩きするを妬まで。異わざするにやあらむ。さるわざせずは、恨むることもありなん」など、心の内に思ひけり。

さて、出でていくと見えて、前栽の中に隠れて、「男や来る」と見れば、端に出でて、月のいとみじうおもしろきに、<sup>⑤</sup>頭かいつりなどして居り。夜更くるまで寝ず、いといたううち嘆きて眺めければ、「人待つなめり」と見るに、使ふ人の前なりけるに言ひける、

風吹けばおきつ白波たつた山夜半にや君が独り  
越ゆらむ

と詠みければ、<sup>⑥</sup>「我が上を思ふなりけり」と思ふに、いと愛しうなりぬ。この今の妻の家は、<sup>⑦</sup>たつた山越えて行く道になむありける。かくて、なほ見をりければ、この女、うち泣きて伏して、鏡に水を入れて、胸になむ据へたりける。「奇し。いかにするにかあらむ」とて、なほ見る。さればこの水、熱湯にたぎりぬれば、湯捨てつ。また水を入る見るに、いとかなしくて、走りいでて、「いかなる心地したまへば、かくはしたまふぞ」と言ひて、かき

抱きてなむ寝にける。<sup>⑧</sup>かくて、外へもさらにかで、つと居にけり。

かくて、月日多く経て思ひけるやう、「つれなき顔なれど、女の思ふことといみじきことなりけるを、かく行かぬをいかに思ふらむ」と思ひいでて、ありし女のがり行きたりけり。久しく行かざりければ、慎ましくて、立てりけり。さて、垣間見ば、<sup>⑨</sup>我には良くて見えしかど、いと賤しき様なる衣を着て、大櫛を面櫛に挿しかけて居りて、手づから飯盛りをりけり。いと「いみじ」と思ひて、来にけるままに、行かずなりにけり。この男は、王なりけり。<sup>(注)</sup>

(為家本)

本話は、ある夫婦に訪れた危機とその克服の物語である。夫婦は長い間思い合つて暮らしてきたが、妻が経済的に不如意となつたため、夫は別に「今の妻」を設けた。妻が一向に恨むそぶりを見せないため、夫は恋人の存在を疑うが、妬心を忍ぶ様子を垣間見てその本心に気づき、想いを深めた。一方、「今の妻」への想いは、同じ垣間見を通して、逆に褪せたことが語られる。

末尾の一文「この男は、王なりけり」については、先

行研究において、夫として『伊勢物語』の男、さらにはモデルの在原業平を想定したと考える立場がある。<sup>(主5)</sup>しかし、他の『伊勢物語』重出章段とは異なり、本段では「在中将」とは呼ばれない。本稿の男については、『伊勢物語』にも登場するような、歌を解し、情愛深い貴種の理解にとどめる。

本段について先行研究が最も注目したのは、傍線部⑦の後続箇所、『大和物語』の独自部分たる鏡のくだりである。従来、嫉妬の「思ひ(火)」によって水が熱湯に変じてしまうとの展開の奇抜さを難ずることも多かったが、この「思ひ」の視覚化という和歌的趣向は、積極的に評価してしかるべきであろう。今井源衛氏の「「思ひ」の文字を表面に出さずに、鏡の水を以てそれをしたたかに示したところに、『大和物語』の作者の腕の見せどころがあったのではなからうか」との<sup>(主7)</sup>評価が首肯される。それでは、このように妬心が誇張されたのはなぜか。また、和歌を詠み出した後に配されたのはなぜか。以下の本節では、和歌の機能を見るために、地の文を類話と比較し、『大和物語』の語りが、ある話題への焦点化を企図して周到に進められていることを論じる。

類似の二話は次のとおりである。『大和物語』との共通要素には、傍線に番号を付した。最初に『古今和歌

集』を、次に『伊勢物語』を掲げる。また、先行研究に倣い、『伊勢物語』は三分割して記号を付した。

題しらず　よみ人しらず

風吹けばおきつ白波たつた山夜半にや君が独り越ゆらむ

ある人、この歌は、昔大和の国なりける人の女にある人住みわたりけり。この女<sup>①</sup>親も亡くなりて家も悪くなりゆくあひだに、この男<sup>②</sup>河内の国に人をあひ知りて通ひつつ、離れやうにのみなりゆきけり。さりけれども、つらげなるけしきも見えで、河内へ行くこと<sup>③</sup>に、男の心のごとくにしつ出だしやりければ、<sup>④</sup>あやしと思ひて、もし無きまにことも心もやあると疑ひて、月の面白かりける夜、河内へ行く真似にて前栽の中に隠れて見ければ、夜更くるまで<sup>⑤</sup>琴をかき鳴らしつつ、うち嘆きてこの歌を詠みて寝にければ、これを聞きて<sup>⑥</sup>それより又ほかへもまからずなりにけりとなむいひつたへたる。

〔『古今和歌集』雑歌下、九九四番歌〕

(A) 昔、田舎渡らひしける人の子ども、井のもとに出でて遊びけるを、大人になりければ、男も女も恥ぢかはしてありけれど、男は、「この女をこそ得め」と思ふ。女は、「この男を」と思ひつつ、親の逢はすれども、聞かでなんありける。

さて、この隣の男の許より、かくなん、

筒井つの井筒に掛けしまろが丈過ぎにけらし

な妹見ざるまに

女、返し、

くらべこし振り分け髪も肩過ぎぬ君ならずして

誰か上ぐべき

など言ひ言ひて、つゝに本意のごとく逢ひにけり。

(B) さて、年ごろ経るほどに、女、「親無く、

頼り無くなるままに、「諸共に言ふかひなくてあら

んやは」とて、<sup>7</sup>河内の国高安の郡に、いき通ふ所

出できにけり。<sup>2</sup>さりけれど、このもとの妻、「悪

し」と思へる気色もなくて、<sup>3</sup>出だしやりければ、

<sup>4</sup>男、「異心ありてかかるにやあらむ」と思ひうた

がひて、前裁の中に隠れりて、河内へ去ぬるがほに

て見れば、この女、<sup>5</sup>いとよう化粧してうちながめ

て、

風吹けばおきつ白波たつた山夜半にや君が独り

越ゆらん

と詠みけるを、聞きて、<sup>6</sup>限りなく「愛し」と思ひて、河内へも行かずなりにけり。

(C) まれまれかの高安に来て見れば、<sup>8</sup>初めこ

そ心憎くも作りけれ、今はうち解けて、手づから飯

匙取りて筒子の器物に盛りけるを見て、心憂がりて

行かずなりにけり。さりければ、かの女、大和の方

を見やりて、

君があたり見つつを居らん生駒山雲な隠しそ雨

は降るとも

と言ひて見いだすに、辛うじて大和人、「来む」と

言へり。喜びて待つに、度々過ぎぬれば、

君来むと言ひし夜ごとに過ぎぬれば頼まぬもの

のこひつつぞふる

と言ひけれど、男、住まずなりにけり。

〔伊勢物語〕第二十三段)

二話の構成の大枠は、最も多くの要素を持つ『伊勢物語』

を基準にすれば、(A) 幼な恋の前史、(B) 危機、

(C) 後日譚に対して、『大和物語』が(B)(C)を持

ち、『古今和歌集』は(B)のみを持つというものであ

る。共通要素①は「今の妻」を設けた理由、②は夫から

見た妻の心境、③は妻の実際の言動、④はその言動に対する夫の疑念、⑤は妻の挙措（『古今』は無し）、⑥は妻の歌を聞いた夫の反応、⑦は「今の妻」の家の場所、⑧は「今の妻」の挙措である。『大和物語』の語りが高い口承的性質を示すことは定説化しているが、表現の類似性の高さは、成立の途上に書承関係が存在したことを示唆するようでもある。三者の成立の先後関係については、『古今和歌集』左注の付加時期や『伊勢物語』の成長過程の問題があり確定できないため、<sup>(注8)</sup>相対的な差異を手がかりに論を進める。

比較の結果から注目されるのは、『大和物語』が妻の嫉妬心とともに、それを隠す姿を強調することである。他の二作品が、②夫から見た妻の心境と③妻の実際の言動とを連続して語るのに対し、『大和物語』は、②と③の間に「心地には限りなく妬く、「心うし」と思ふを、忍ぶるになむありける」との独自部分を持ち、妬心を忍ぶことを直接的に注している。饒舌な『大和物語』ならではの語りであり、抑制的な語りを行う『伊勢物語』や、左注という付属の部分にある『古今和歌集』との安易な比較は慎むべきだが、『大和物語』の語りが、妻が妬心を押し隠すさまに照準を合わせ、言葉を重ねて強調していることまでは理解されよう。<sup>(注9)</sup> 前述の鏡場面の誇張

表現も、この観点から検討する必要がある。

従来、妻が水の入った鏡を胸に当てるくだりについては、嫉妬の「思ひ」の強さに目が奪われがちであった。しかし、北村季吟が「水にてむねのほのを、さますさま也」と注し、増淵勝一氏がこの妻を「抑えがたい胸の熱さを金椀の水で冷やしつづける女」と形容するのは傾聴すべきであろう。<sup>(注10)</sup> 水が熱湯と化す展開は、「湯捨てつ。また水を入れる」という、冷ます動作を伴って語られる。鏡場面を通して語られているのは、妬心を冷まさそうとする空しい努力なのである。地の文からは、本段が「嫉妬を忍ぶ心」に焦点化して語ると言える。

『大和物語』の章段が、言葉と内容上の連鎖を以て緩やかに展開することはすでに指摘されているが、この「嫉妬を忍ぶ心」への関心は、『大和物語』に見える章段連鎖の法則からも保証される。本章段は、言葉の上では、前接の第四百四十八段とは「容貌いときよらなり」「年ごろ（相思ノ仲デアッタ）」「いと悪く（ナツタノデ）」「思ひわづらひて（生活ノ糧ヲ得ル方法ヲ探シタ）」が、後続の第五百十段とは「限りなく思ひながら」「殊に思はねど」そして何より女の「限りなく（ねたく）心うし」との心情が共通する。そして内容の上でも、本段の、長年相思の仲の夫婦が経済的困窮により危機を迎え

るといふ枠組みが、第四百四十八段と一致する。また、女が本心を忍ぶという状況は、第五百十段と一致するのである。特に次段との繋がりから、本段の語りはやはり、妻の「嫉妬を忍ぶ心」を語ることを志向すると言える。

それでは、この「嫉妬を忍ぶ心」に焦点化する語りにおいて、和歌はどう位置づけられているのか。実は、三作品の共通要素のうち、⑦「今の妻」の家の場所は、『大和物語』において他の二作とは顕著な相違を見せており、手がかりとなる。

第一に、紹介される位置であるが、『古今和歌集』『伊勢物語』は①の直後にあるものの、『大和物語』ではさらに後、歌の後ろの草子地の中に「この今の妻の家は、…なむありける」と取り込まれ、妻の歌が夫に衝撃を与えた理由を説く役割を担っている。家の場所は他の二作品のように、「今の妻」の紹介と同時になされるのが自然にもかかわらず、留保されているのである。

そして第二に、その描写方法である。『古今和歌集』は「河内の国」、「伊勢物語」は「河内の国高安の郡」と具体的な地名を出すのが、『大和物語』は「たつた山越えて行く道」として、和歌の中の言葉を用いつつ説明的に紹介する。

さらに言えば、歌のすぐ後に語り手が顔を出すこの草

子地は、『大和物語』の特質をうかがわせる草子地でもある。このくだりを肯定的に評価する先行研究は少ないが、⑦からは『大和物語』の語り手のこだわりがうかがわれよう。次節では、この草子地の目指す語りを考察した上で本段における意味を論じ、和歌の機能を探る助けとする。

## 二 注釈的草子地に見る関心

問題の草子地は、和歌を注釈する体を取り、平安期歌物語『伊勢物語』『大和物語』『平中物語』のすべてに見られる。歌に重きを置いて語るジャンルに相応しい草子地と言えるが、これまで体系的に論じられることはなかった。

歌物語における和歌の位置づけを論じるには、草子地だけでなく広く評語への目配りも必要だが、多様な評語のすべてを総合的に分析することは困難でもある。注釈的草子地は、和歌一首に直接的に言及するという意味において語り手の和歌への関心を端的に示すものであるため、本節では、この草子地の考察を端緒として歌物語諸作品が関心を持つ和歌の要素を論じ、『大和物語』第四百九十九段を読み解く手がかりとする。

この草子地は五種の型に分かれる。今、『大和物語』

によつて主要二種の例を掲げる。

この大徳、坊にしける所の前に切懸けをなむせさせける。その削り屑に書きつけける。

籬する飛驒の匠のたつき音のあなかしがましなぞや世中

など言ひて、「行ひしに深き山に入りなむとす」と言ひて去にけり。程経て、「いづくにかあらむ」とて、「深き山に籠りたまひぬとありしはいづくぞ」と言ひやりたまひたりければ、

何ばかり深くもあらず世の常の比叡を外山と見るばかりなり

となむ言ひたりける。横川と言ふ所にあるなりけり。  
(第四十三段)

亭子の帝に右京大夫の詠みて奉りたりける、

あはれてふ人もあるべく武蔵野の草とだにこそ生ふべかりけれ

また、

時雨のみふる山里の木の下はおる人からやもりすきぬらむ

とありければ、顧みたまはぬ心ばへなりけり。「帝

御覽じて、『何事ぞ。心得ぬ』とて僧都の君になむ見せたまひけると聞きしかば、効なくなんありし」と語りたまひける。  
(第三十二段)

いずれも歌の後に見られ、歌の内容を補足的に解説するものである。前者は大徳が詠んだ歌を注するが、ここでは「比叡を外山と見るばかり」と詠む根拠を説いている。比叡を外山と見る場所ならばいくつも考えられようが、それを横川という場所に限定する。これは「状況」を説く型であり、他に第三十六・百三・百二十五・百三十八・百四十九・百六十二・百六十八段に見える。<sup>(注)</sup>本稿が注目する第百四十九段の草子地は、歌が「たつた山」を「越ゆ」という状況を詠む根拠を説くため、こちらに含まれる。

一方、後者は右京大夫が亭子の帝に奉った歌を注するが、この歌を見た帝は意味がよく分からないと答えた。右京大夫の物語は第三十―三十二段に連続して語られており、右京大夫は、第三十段でも「成り出づべきほどに、我が身のえ成り出でぬこと」と出世できぬ身を不満に思っていた。二首目の「漏り過ぐ」には叙位に漏れる意を掛けたことになるが、帝はとくにないがしろにしているとの意識がなかったためか、理解ができなかったと

いう。「心ばへ」を説く傍線部の草子地により、和歌に込められたこの意図は鮮明になる。これは「歌意」を説く型であり、他に第百四十二・百五十二段に見える。

第三の注釈的草子地は、「由来」を説く型で、第百五十六段、いわゆる姨捨山章段に見える。紙幅の都合もあり、他の歌物語に見えない型であるため本文は引用しないが、当該章段は『古今和歌集』雑歌上所収歌「わが心なくさめかねつさらしなやをばすて山にてる月を見て」(八七八・題不知・読人不知)の読まれた背景を語るものであり、歌の後で「慰めがたし」とは、これが由になむありける」と結ばれる。当該歌は第百四十九段所収歌とは異なり、『古今和歌集』において左注を持たないため、詠歌背景は一切不明であった。第百五十六段は、あたかもその背景を明らかにし、以て姨捨山の月の詠法の「由来」を教えるような注釈的草子地となっている。

第四、五の草子地は『伊勢物語』のみに見える。すなわち、第四は「態度」を注する型で、第三十四段に、つれない女に厚かましく歌を詠み掛けたことを「おもなくていへるなるべし」と注している。そして、第五は「動機」を注する型で、第四十二段で、色好みの女を数日間訪えなかつた時に詠みやつた歌を「もの疑はしさに詠めるなりけり」と説いている。

興味深いのは、これら「歌意注」「状況注」「由来注」「態度注」「動機注」の注釈的草子地が、作品間で異なる数値的分布を見せるということである。いずれの作品においても合計数は決して多くはなく、また、あくまで形式に基づく分析ではあるが、作品性を知る手がかりとなるため、左に表として掲げる。

	状況	歌意	由来	態度	動機	総数
『伊勢』	3 <sup>(注17)</sup>	3 <sup>(注18)</sup>	0	1	1	8
『大和』	8	4 <sup>(注19)</sup>	1	0	0	13
『平中』	0	1 <sup>(注20)</sup>	0	0	0	1

(参考)『唐物語』：歌意注1例。<sup>(注21)</sup>『今物語』：いずれも0例。

総数の上で最も多いのは『大和物語』である。そして、「状況注」「歌意注」が同数存在する『伊勢物語』に対し、『大和物語』は「状況注」が過半を占めている。『伊勢物語』についてさらに言えば、注が付されている五種は、すべて「男」の歌であり、「男」の一代記として自然な傾向と言えよう。また、『平中物語』以下、歌物語と呼びうる『唐物語』『今物語』には、表現注そのものが少ないことも指摘できる。『大和物語』についてまとめ直せば、歌物語において最も多くの表現注を持



ち、歌意よりも状況への関心が強く表面化していることになる。

歌を語る作品において、その歌を注する草子地に見える傾向は、語りの関心を端的に示す。したがって、歌物語の中で最も注釈的草子地が多く、和歌を明示的に説く語りを志向する『大和物語』は、和歌が詠み出だされた「状況」に関心が強い作品ということになる。<sup>(注2)</sup> また、この特徴が作中に遍在することは、詠歌状況への関心が作品に底流し、雑纂的とされる作品を一個の統一体として存在ならしめる一端を担った可能性も指摘できるだろう。<sup>(注3)</sup> 本稿の問題とする第百四十九段はこの特徴を持つ代表的な章段であり、⑦の挿入位置に見られるように、類話二作品とは違い、「今の妻」の家の位置という情報を、歌のすぐ後ろのこの草子地で、和歌の中の言葉を用いて説明している。これにより、和歌に詠まれた「たつた山」を「越ゆ」という状況への注目を促し、妻の「嫉妬を忍ぶ心」の語りへと収斂させるのである。

それでは、『大和物語』は、「たつた山」を「越ゆ」という状況に注目させることで、何を言わんとするのか。次節では最後に、和歌に見出された意味を探るため、和歌一首の表現性を考察する。

### 三 「たつた山」を「越ゆ」ということ

第百四十九段所収歌「風吹けばおきつ白波たつた山夜半にや君が独り越ゆらむ」は、特異な表現を持つ歌である。上二句では「白波」と海の景を詠みながら、第三句で掛詞「たつ」を軸に景を転換し、山越えを詠む。柿本奨氏が詠作の背景を「民謡系の歌なのであろう」「いくつかの因数となる歌句に分解できる」として「風吹けば」沖つ白波」と「山」を「越ゆらむ」の句を持つ歌々を挙げるように、異なる二種の要素を組み合わせたかのようである。<sup>(注4)</sup>

しかし、二要素が同時に取り込まれた時、一首は困難な山越えを詠んだ歌として融合し、定位されることになる。「白波」とは、たとえば「野分して白波立たむ時だにも過ぐさず君に逢ひ見てしがな」(西本願寺藏「敦忠集」五五)と詠まれるように、強風によって起こる大きな波である。竜田山は、「其の路狭く険しく、人、並行くことを得ず」(『日本書紀』神武天皇即位前紀戊午年四月)と形容され、「天の下の公民の作り作る物を、悪しき風・荒き水に相わけつ、成さず傷る」神(『延喜式』神祇八・祝詞「竜田風神祭」)を祭る地でもあった。一首は、沖合にまで白波が立つような強い風が吹く狭く険しい山路を、夜半に、しかも独りで越えゆくという幾重

もの困難を案じる歌ということになる。<sup>(注2)</sup>当該歌については、顕昭(一一三〇頃生—一二〇九以後没)が「白波」に「盗人」の比喻を見出して以来、盗賊に襲われる不安をも詠み込んだ歌と考へる立場もある。<sup>(注3)</sup>本稿では取らない解釈だが、このような解釈が生じるのも、当該歌の特殊な表現性が想像力を喚起するためであろう。当該歌が『古今和歌集』のみならず『伊勢物語』『大和物語』にも取り込まれ、有名歌となった一因も、一首の表現性にあるのではないか。

当該歌が『大和物語』の頃に有名であったことは、『古今和歌集』所収歌であったことのみならず、『古今和歌六帖』に二度収められていることから推測される。二箇所はともに末句が「独り行くらん」とあるため、「大和物語」よりも起点を明確にした詠みぶりとなっているが、作者名に「かぐやまのはなのこ」(第一帖・天・雑風・四三六)、「かごのやまのはな子」(第二帖・山・八五七)とあり、『大和物語』と同様に、竜田山のある大和国に住む女性の歌として伝承されていたことが分かる。

それでは、『大和物語』はなぜ、その周知の歌に対して、「たつた山」を「越ゆ」という部分に注目し、妻の嫉妬を強調して「忍ぶ心」を語ったのか。『大和物語』

と同時代の勅撰集である『後撰和歌集』を閲するに、歌枕「竜田山」自体も紅葉の名所として愛好されたことがわかるが、手がかりは別にある。たとえば、『後撰和歌集』には次のような歌がある。

男の問はずなりにければ　よみ人しらず

音もせずなりもゆくかな鈴鹿山越ゆてふ名のみ高く

立ちつつ

返し

越えぬてふ名をなうらみそ鈴鹿山いとど間近くなら

んと思ふを

(恋六、一〇四〇・一〇四二)

右の贈答では、女が、訪れなくなった男に、逢ったとの噂だけが高く立って音沙汰がなくなつてゆくと語り、男がそれを宥めている。「鈴鹿山」を「越」えることが、新たに關係を結ぶことの比喻となつている。片桐洋一氏が贈歌の注で指摘するように、關係を結ぶ比喻としては「逢坂山(関)」を越えるとの表現が一般的であったが、その変形として、場に相応しい山の名を詠むことが行われていたのである。<sup>(注4)</sup>たとえば、『古今和歌集』では、大和に住む人に対し、「吉野山」を詠み込む。

大和に侍りける人に遣はしける (貫之)

越えぬまは吉野の山のさくら花人づてにのみ聞きわたるかな

(恋二、五八八)

所収の部立は恋二であり、「人」は恋の相手を指す。その相手を桜に喩え、恋人になるまでは、素晴らしさを噂で聞くことしかできないと嘆じている。

また、『後撰和歌集』よりやや後の例ではあるが、天慶八年(九四五)頃に生まれた源時明は、自分が恋心を訴えても耳を貸さず、他の男と恋仲になった女に「耳成山」を詠み込んだ歌を送る。

内膳の命婦を年頃言ひしかど、つれなくてやみにしを、人通ふと聞きて

年経れば人越えけりな賢しくてこと聞かざりし耳なしの山

(書陵部蔵五〇一・三九七『時明集』、一三)

すなわち、『古今和歌集』以来、「山」を「越ゆ」とは、新たな男女関係を持つことの比喩として詠まれていたのである。

第四百十九段の夫の山越えは、妻から見れば、風が吹きすさぶ狭く険しい山路を、夜半に、独りで行くという、大きな危険を伴うものであった。これは、山を越えることが新たな男女関係の成立を比喩する世界においては、物理的のみならず、心理的な隔たりの発生をまざまざと突きつけるものである。妻は、長年仲睦まじく連れ添った夫が困難を押しついで山を越え、遠くへ離れていく姿を想像することで、夫に新しい関係が生じた現実を思い知らされ、妬心を強める。『大和物語』が他作品よりも妻の嫉妬を強調した語りを成し、状況注の草子地を用いたのは、「たつた山」を「越ゆ」という部分に意味を見出し、和歌の言葉に、現実の再認識を促す機能を認めたからであった。

おわりに

『大和物語』の大部分が成立したのは、村上天皇在位中の天曆五(六年(九五一)二)頃と言われ、大方の了承を得ている。当時は、『古今和歌集』によって和歌が正当な文芸として言挙げされてから半世紀が経ち、数多くの物語的な私家集が編まれ、二番目の勅撰集『後撰和歌集』の撰集が下命された頃であった。和歌は隆盛期のただ中であつたのであり、表現は、日々に交わされる贈

答を通して磨かれていたと思しい。

第四百十九段「風吹けば」詠の語りはそのような中で、「山」を「越ゆ」という状況に着目して嫉妬心を強調し、語られたものであった。ここでの和歌には、現実を再認識させ、嫉妬心を増幅させる作用が見出されている。そして、和歌の後ろに嫉妬心を冷まそうと繰り返し試みる様子を描写することで、妻が本心を忍ぶさまに焦点化している。夫が妻の許へ戻るのも、強く忍ぶこの本心ゆえである。

『大和物語』には他にも、詠歌状況に着目して語る章段がある。また、和歌の意味や由来に着目する章段がある。これらにおいて、和歌への注釈的草子地からうかがわれるのは、和歌の表現形成に対する関心であろう。豊かな多様性を湛える『大和物語』には、和歌の盛んな贈答を背景として、和歌の表現形成への興味がたしかに存在している。

#### 注

- (1) 福井貞助「歌語り」(『日本古典文学大辞典』一九八三年、岩波書店) など。
- (2) 福井貞助「歌物語」(『日本古典文学大辞典』一九八三年、岩波書店)。

(3) 関係性を正面から論じた先行研究には、歌の前後の地の文に注目した加藤岳人氏の論がある。加藤氏は、『大和物語』に「ありけり型」で歌を受ける特徴や贈答表現における「おこす」の多用を認め、「人物の行為を語ることと歌を様々な視点から語ること」を特徴として指摘する(『大和物語』の表現―歌をどう語るか―)『国語国文研究(北海道大学)』九八、一九九五年二月、二六頁)。本稿は、後述のとおり、語り手の関心の端々な現れである草子地特徴に着目する。

(4) 異本系諸本に、さらに一文あり。御巫・鈴鹿本「在中将の事とぞ聞こえし」、九大・久曾神本「在中将の事とぞほんに侍る」。臚化を志向する「王なりけり」と対立するため、本稿では採らない。『伊勢物語』に類話がかかることによる後補であろう。

(5) 今井源衛『大和物語評釈』下(二〇〇〇年、笠間書院、初出一九六六年一月)と森本茂『大和物語全釈』(一九九三年、大学堂書店)。

(6) 阿部俊子・今井源衛校注『大和物語』(一九五七年、岩波書店)、注5森本注釈書、竹岡正夫『伊勢物語全評釈』(一九八七年、右文書院) 第二十三段注。

(7) 注5今井注釈書、二二三頁。亀田夕佳氏はこれを更に進めて、「湯」ではなく「熱湯」と強めた点を独自性と

して評価する（『大和物語』の〈歌ことば〉——一四九段「この水、熱湯にたぎりぬれば」をめぐって——『人文研究論叢』四、二〇〇八年三月）。

(8) 注5今井・森本注釈書は、『大和物語』が二作品を参照

したとの前提で論を進め、雨海博洋・岡山美樹『大和物語』下（二〇〇六年、講談社）は、『古今和歌集』左注から『伊勢物語』『大和物語』が派生したとする。しかし、『古今和歌集』左注の成立は元永三年（一一二〇）まで降る可能性すらある（奥村恒哉「古今和歌集の左註」『二冊の講座 古今和歌集』一九八七年、有精堂）。片桐洋一氏は、左注後人付加説に立ち、『古今和歌集』が『伊勢物語』を参照したとする（『古今和歌集全評釈』下、一九九八年、講談社、九九四番歌注）。

(9) 共通部分②③については、『大和物語』の妬心とその抑圧が、他作品に比べても強調されていると言えるかもしれない。②「さらにさらに妬ねげにもみえず」は他作品とは異なり、打ち消しの呼応表現を用いることで明確に妬心を強調している。そして③妻の許に留まろうとする夜も「なほ」往ね」と言「うとのくだりは、他作品が夫の望みどおりに送り出す姿を語るのに対して、夫が望まない場合ですら出掛けることを勧めたと語っており、本心に反した積極性を語る具体的挿話を持ってい

る。

(10) 季吟は『大和物語抄』一〇五頁、増淵氏は『大和物語』の作者をめぐる問題」（『並木の里』二八、一九八七年三月）五五頁。

(11) 言葉の連鎖について網羅的に論じたものは、小形ひとみ『大和物語』の章段の配列について」（『国語と教育（長崎大学）』一四、一九八九年一月）。内容上の連鎖は、高橋正治「解説」（『大和物語』一九九四年、小学館、初出一九五三年二月）、柿本奨「章段別内容一覧表」（『大和物語の注釈と研究』一九八一年、武蔵野書院、初出一九七七年一月）。

(12) 注11柿本注釈書は、「以下の一文は歌の理解のためにつけた草子地」と注するに留まる。岡部由文氏は、「今の妻」の在所が物語の冒頭では触れられないことに意義を認め、「風ふけば」歌の理解を助けようとする叙述」とするものの、特徴的草子地である点は考慮に入れず、語りの効果を、「男の心の動きが具体的必然性をもって瞬時に理解される仕掛けになっている」と限定的に捉える（「歌語りの叙述——伊勢物語・大和物語を中心に——」『散文学（物語）の世界』一九九五年、三弥井書店、一三六頁）。

(13) この観点から論じたものに岡部由文氏の論がある

〔『伊勢物語』と『大和物語』の和歌評語〕『伊勢物語の表現史』二〇〇四年、笠間書院。

- (14) 第三十六段「かの齋宮のおはします所は、たけの宮となむ言ひける」、第百三段「武蔵の守の女になむありける。それなむ、いと濃き挿練着たりける。それをと思ふなりけり」、第百二十五段「まことにまいいと小さき女になむありける」、第百三十八段「このこやくしと言ひける人は、丈なむいと短かりける」、第百六十二段「同じ草を忍ぶぐさ、忘れぐさと言へば、それよりなむ詠みたりける」、第百六十八段「しばし」と思ひてうち休みけるほどに、子過ぎにたるになむありける。

- (15) 第百四十二段「かく言ひける心ばへは、…「一生に男せで止みなむ」と言ふことを、世とともに言ひける」、第百五十二段「御心にいと言ふかひなく惜しく思さるるになむありける」。

- (16) この草子地が「由来」を説くことは、三角洋一氏がすでに「歌まなび」の観点から指摘している（『歌まなびと歌物語』『国語と国文学』六〇（五）、一九八三年五月）。

- (17) 第十九段「また男ある人となむ言ひける」、第八十一段「塩竈と言ふ所に似たる所なかりけり。さればなむ、…「塩竈にいつか来にけむ」と詠めりける」、第八十三

段「時は弥生のつごもりなりけり」。今ここで成立論に踏み込む余地は無いが、片桐洋一氏の説に立てば、すべてが『大和物語』と成立時期が重なり合う第二段階の『伊勢物語』に含まれている（『伊勢物語研究』『研究編』一九六八年、明治書院）。

- (18) 第一段「みちのくのしのおもぢずり誰ゆゑに乱れそめにしわれならなくに」といふ歌の心ばへなり」、第四一段「武蔵野の心なるべし」、第七十六段「心にもかなしとや思ひけむ、いかが思ひけむ、知らずかし」。いずれも、片桐氏の指摘する第二段階成立章段に含まれる。第七十六段は最終的には「知らずかし」と結ぶため、厳密には歌意を注したことはならないが、歌意への関心の表れであるため、例に含めた。
- (19) 第九段「この女の住みける所をぞ、石上とは言ひける」。

- (20) 第一段「心のすきたる程はこれにて思ひ知るべし」。

- (21) 「態度注」「動機注」を詠歌の背後にある心理的要素への注と見れば、「歌意注」と合わせて八例中五例が、詠歌をめぐる心情を注したことになる。数は少ないながら、『伊勢物語』の注釈的草子地が示すのは、男の詠歌をめぐる心情への関心とも言えるのかもしれない。

- (22) 『大和物語』『伊勢物語』の関心がそれぞれ「状況」「心

情」と呼びうるものへ傾斜するとの指摘は、別に糸井通浩氏の論にも見える。氏は、和歌を受ける「とあり」型形式と地の文の「けむ」を分析した結果、「歌をめぐる「語り」の関心のありどころ」を『伊勢物語』とは異なると論じ、『大和物語』では歌（の内容）に関わる人物の内面にはなくて、歌の成立に関わる環境―歌の言語場―の言語場外面のことから（事態・状況）に向いている」と結論づける（「語り」言語の生成―物語の文章―『龍谷大学論集』四四七、一九九五年二月、四〇頁）。本稿とは別の観点から論じながら同様の特徴を指摘する点は重要であり、草子地特徴への着目の妥当性を側面から保証する。

- (23) 『大和物語』の雑纂性については、注11柿本注釈書の「大和物語研究 四 物語集の形成」、今井源衛「大和物語」（『日本古典文学大辞典』一九八五年、岩波書店）等に指摘が見える。とくに物語本体の前半と後半では、その内容に「当代の宮廷歌人の逸話」と「古伝承」と形容されるような質的相違のあることが定説となっている（注5今井注釈書「解題」四九二頁等）。
- (24) 注11柿本注釈書。

- (25) 序詞の上句を、実景としては両立不可能と見て無心の序と取る説もあるが、合理的な解釈は可能である。

(26) 注5今井注釈書。しかし、竜田山と盗人を結びつける歌は、盗賊不安説の根拠とされる藤原為頼（？生―九九八没）の「ぬす人のたつたの山に入りにつけりおなじかざしの名にやげがれん」（『拾遺和歌集』雑下・五六〇。『拾遺抄』五三九）以外に存在しない。該歌が竜田山の盗人を詠むのは、詞書に「廉義公家のかみえに、たびびとのぬす人にあひたるかたかけける所」とあるため。詞書を共有する次歌「なき名のみたつたの山のふもとには世にもあらしの風もふかなん」も勘案するに、竜田山が選ばれたのは、「名が立つ」と詠むための一回的な言語的興味によるう。

(27) 竜田の地を詠んだ一四首のうち、一二首が竜田の「山」を詠み、また、景としては一二首が紅葉を詠む。数がすべてではないが、八代集中では、『新古今和歌集』の一三首に次いで、竜田山を詠んだ歌が多い。

(28) 「逢坂山」には、たとえば「あらたまの年はけふあす越えぬべし相坂山を我や遅れん」（『後撰和歌集』恋六・一〇七四・藤原時雨「物言ひ侍りける女に、年の果ての頃ほひ、遣はしける」）がある。

※引用本文は、為家本『大和物語』は高橋正治『大和物語の研究 系統別本文篇』上（一九八八年、臨川書店）、『古今和

歌集』は久曾神昇『古今和歌集 伊達本』（一九七一年、笠間書院）、『伊勢物語』は「影印校注古典叢書」、『大和物語抄』は「北村季吟古註釈集成」、『平中物語』は目加田さくを『平仲物語』（一九七六年、武蔵野書院）、『唐物語』は「講談社学術文庫」、『日本書記』は「新編日本古典文学全集」、『延喜式』は「訳注日本史料」、『古今和歌六帖』は「図書寮叢刊」、『後撰和歌集』は「冷泉家時雨亭叢書」、私家集は「私家集大成」、その他和歌と歌番号は「新編国歌大観」CD-ROM版Ver. 2による。一部校訂を加え、表記を改めた。

（たまたま・さおり／名古屋大学大学院博士課程後期）